

後世に受け継ぎたい花脊の伝統食しば漬け



しもはた 下畑 良子さん おがや み え こ 鋸屋美恵子さん (左京区花脊)

「京都の奥座敷」と称される左京区^{はなせ}花脊は、もともと林業が盛んな地域で、現在も山、川や森に囲まれた自然豊かな風景が広がります。鋸屋美恵子さんと下畑良子さんは、花脊の伝統食である「しば漬け」づくりを50年以上続けられており、技術を保持されています。

花脊のしば漬けは「ミョウガ」を入れるのが特徴で、ナスやシソ等地元でとれた野菜を使用し、調味料は塩のみで乳酸発酵させるので、独特のやわらかな風味があります。また、鮮やかな赤いシソの色を出すために、シソや塩を絶妙に配合しながら作っています。

鋸屋さんと下畑さんは、京都市生活研究グループ連絡協議会に所属し、花脊の家庭の味を後世に引き継ぐため、地元の小中学校で親子を対象とした食育や市民に広く料理講習会を行うなど伝承活動も積極的に行ってきたことが評価され、令和3年に京都府農山漁村伝承技能に登録されました。これからも元気に活動されます。

普及計画活動

令和3年から5年まで3年間取り組んだ重点計画と、

重点計画

担い手の定着と経営向上への支援



継続した訪問により農家の課題解決を支援

1 新規就農者の営農継続に向けた支援

新規就農者（3年間で延べ11名）を対象に、自立的な営農を目指して毎年の目標を設定・共有し、達成に向けて栽培技術指導や情報提供等の支援を行いました。その結果、5名が1～3年かけて概ね個別目標を達成し、収量向上や経営規模拡大につながりました。

就農後概ね3年以内の新規就農者（3年間で延べ41名）を対象に、農業基礎講座（年4～6回）を開催しました。各回の講座では、座学と現地研修により農業の基礎知識を習得するとともに、先輩農業者を交えた交流会や名刺交換会を行い、受講生同士の交流が深まりました。

2 経営力アップを目指す農業者への個別支援

経営力アップを目指す農業者（3年間で延べ10名）へ、各自の経営課題の整理と課題解決に向けた取組の支援を農業会議等と連携して行いました。その結果、6名が品目の見直しや整理、作業場や雇用方法の改善、主要品目の作期拡大・販路開拓、病害虫対策等に取り組み、目標を達成しました。



現場で農家から講義を受ける基礎講座受講生

重点計画

新たな特産品目の生産振興と スマート農業技術の活用による安定生産

1 京おくら出荷部会の生産技術の向上 対象者：京おくら出荷部会22名

新技術の現地実証ほや個別巡回指導等を重点に、関係機関と連携して出荷部会の活動を支援しました。その結果、出荷量、栽培面積、新規生産者数は目標を上回りました。なお、オクラを地域の新たな特産品に育成するため、産地戦略を策定し生産拡大を図ることとなりました。



オクラ現地検討会

2 環境測定装置等を活用した施設重点品目の栽培技術の向上



データを確認しながら、イチゴハウス内環境を最適化

【トマト】対象者：山科区トマト生産者1名

施設抑制栽培において、環境測定装置を設置し培地の温度測定やマルチ資材の変更により、培地の温度上昇の抑止に努めることで生育の改善が図れました。

【ブドウ】対象者：山科区勧修寺ブドウ部会18名

房の上に環境測定装置を設置し、果実表面の温度を把握しながらタイミングよく日除け傘を設置することで、果実焼けが解消できました。

【イチゴ】対象：西京区大原野イチゴ生産者2名

施設内の環境測定や生育調査を定期的実施し、給液ECの適正化と土壌水分の安定化を図ることで、収量・品質の向上につながりました。

3年間のまとめ

一部ですが5年度の調査研究活動を御紹介します。

重点計画

京式部及び特別栽培米の安定生産と米の緊急課題対策

1 採種地での新品種「京式部」試作

令和3年、右京区京北で京式部の採種に初めて取り組むにあたり、定期的なほ場巡回やいもち病の初期防除などの情報提供を行うことで、無事に収穫をすることができました。

2 使用資材や施肥方法の変更等による高温障害対策の検討

特別栽培米の安定生産のため、水管理や耐暑性向上効果が期待できる資材の試験など、高温対策技術に取り組みました。

3 トビイロウンカに対する防除技術の検討

水稻で令和2年度に激発し被害を生じたトビイロウンカ対策（ほ場での見取り方法や農薬の使用など）を中心に技術情報を配布し、周知徹底に努めるとともに、前年の激発ほ場で初発状況確認の調査を行いました。



生育調査で高温対策の効果を把握

4 祝2号の導入に係る現地試作の支援

令和6年からの酒米祝2号への切り替えに備えて、試作ほ場を設置し、品種特性の調査や栽培管理の確認等を行い、従来の祝と収量、品質で遜色ないことを確認しました。



トビイロウンカ対策の情報

～調査研究計画～

地域の未利用資源（公共施設の落ち葉）を活用した落ち葉マルチに係る実用性の検討

公共施設等の樹木から出る落ち葉は、一部は腐葉土等の堆肥原料として利用されていますが、その多くが廃棄されており、活用方法が検討されています。そこで、落ち葉を有機物マルチとして使用した場合の抑草効果等を調査しましたので、その一部を紹介します。

4月24日定植のナス（千両二号、台木：トルバム・ピガー）において、黒マルチを展張した「黒マルチ区」（写真1）、畝表面を落ち葉で被覆した「落ち葉区」（写真2）、被覆していない「無処理区」（写真3）を設けました。6月5日時点の3区の雑草の発生量は、「黒マルチ区」は雑草がなく、「落ち葉区」は172 g/m²、「無処理区」は1022 g/m²の雑草が繁茂する結果で、「落ち葉区」は、「黒マルチ区」には劣るものの、抑草効果が見られました（図1）。また、ナスの生育に大きな違いは認められませんでした。



黒マルチ区（写真1）



落ち葉区（写真2）



無処理区（写真3）

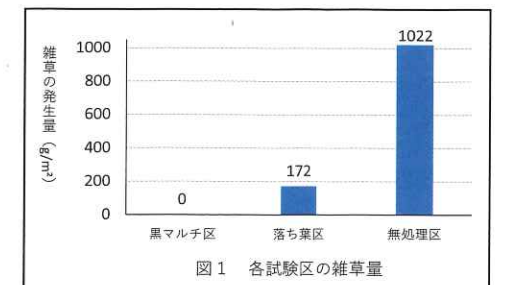


図1 各試験区の雑草量

最近よく聞く病害虫とその対策

イネを加害するカメムシ類

近年の地球温暖化により、カメムシ類の被害が増加しています。京都府内でもカメムシ類の発生が多く、令和4年には「果樹カメムシ類」と「斑点米カメムシ類」、令和5年には「吸実性カメムシ類」の病害虫発生予察注意報が発表されました。特に管内で被害の多い「斑点米カメムシ類」について紹介します。

【斑点米カメムシ類】

斑点米カメムシ類は約30種類といわれており、その多くは、イネが出穂する前に水田付近の畦などの雑草に生息し、イネが出穂した後に水田内に侵入し、穂を加害します。主な対策として、①出穂2週間前までの畦畔の草刈り②穂揃期と傾穂期の薬剤防除が挙げられます。

①畦畔の草刈り

稲が出穂する2週間前と出穂直前の2回行うとより効果的ですが、作業の都合上1回で済ませる場合は、必ず出穂の10日前までに行うように注意してください。出穂期に近づきすぎると、カメムシを水田に追い込み、かえって逆効果になってしまいます。

②薬剤防除

カメムシ類の密度が高い水田では、穂揃期と傾穂期の2回行うことが有効です。農薬散布にあたっては使用基準を遵守して適正に使用してください。最新の農薬情報は農林水産省HPの「農薬登録情報検索システム」を参照してください。

なお、斑点米カメムシ類の一種で、全国で被害が増加している「イネカメムシ」(写真)は他の斑点米カメムシ類と生態や加害の仕方が異なるため、上記とは異なる対策が必要です。

イネカメムシは、籾を吸汁して斑点米を発生させるだけでなく、出穂直後の穂を加害することで不稔籾を発生させ、立ち穂による減収を引き起こします。そのため、不稔籾を発生させないためには、出穂期前に農薬防除を行い、出穂直後の稲穂への加害を防ぐ必要があります。



イネカメムシ

伴走支援事例

イチゴの二酸化炭素発生装置導入

田中宏明さんは、京都市西京区大原野で6年前からイチゴの観光農園と直売所の運営をされています。田中さんのイチゴ栽培において、需要が供給を上回っていることが課題でした。希望する農地が手に入らないことや昨今の物価上昇・資材不足から、規模拡大は考えづらい状況でした。

そこで、栽培面積は拡大せず、収量を増やすため、既存の環境測定装置と連動できる二酸化炭素発生装置を導入し、光合成促進による収量増加を目指しました。

その結果、前年度と比較して、葉の展開が早く、収穫時期を半月以上早めることができ、売上は昨年と比べて12月で23.5%、1月で13.2%増加しました。

これは、二酸化炭素の局所施用により、光合成が促進され、充実した株に成長した結果だと考えられます。従来の二酸化炭素発生装置では温風も同時に排出されるため、高温が問題になりやすい5月以降には使用は不適ですが、今回導入した装置は温風が出ないため、高温を気にすることなく二酸化炭素施用ができ、今後は収穫期間の延長やさらなる増収に向けて活用を進める予定です。



導入した二酸化炭素発生装置



収穫期のイチゴハウス



二酸化炭素の局所施用

トマトのウイルス病

近年トマト栽培で発症が認められた新たなウイルス病を紹介します。

【トマト黄化えそ病 (TSWV)】

①病徴：生育初期から上位葉が生気を失って黄化萎ちょうし、症状が進むと株が枯死することがあります。果実では、着色ムラやこぶ状の隆起等が見られ、商品価値が著しく低下します。(写真上)

②病原ウイルスの特徴：アザミウマ類(主にミカンキイロアザミウマ)の吸汁加害により伝染します。

【トマト黄化病 (ToCV)】

①病徴：発病初期には葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、症状が進展すると病徴は葉全体に及び、症状が激しくなると、株の生育が抑制され減収します。病徴は生理障害の苦土(マグネシウム)欠乏の症状に類似し、外観からの判別は困難な症状です。(写真下)

②病原ウイルスの特徴：コナジラミ類(タバココナジラミ、オンシツコナジラミ)の吸汁加害により伝染します。

【防除対策】(黄化えそ病、黄化病共通)

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、ポリ袋等に密閉してほ場外に持ち出し、適切に処分しましょう。

(イ) 施設では、開口部に防虫ネット(0.4mm目合い以下)を展張し、施設外からの侵入を防ぎます。
※アザミウマ類には、赤色防虫ネットによる侵入抑制が有効です。

(ウ) 薬剤防除に当たっては効果の確認に努め、感受性低下が疑われる場合は、系統の異なる薬剤を散布します。(薬剤ローテーション散布)

(エ) 収穫後の残さや雑草は虫の生息・増殖場所となるので、除草や残さ処理を徹底します。

(オ) 施設では、栽培終了後に施設を密閉して蒸し込み、残存する虫の死滅を図りましょう。



黄化えそ病



(果実)



黄化病

制度の紹介

みどり認定がスタートしました！

令和3年、国は新たに「みどりの食料システム戦略」を策定し、2050年までに目指す姿として、

- ・農林水産業のCO₂(二酸化炭素)排出量をゼロにする
- ・化学農薬使用量を50%、化学肥料使用量を30%減らす
- ・有機農業の取り組み面積の割合を25%(100万ha)に拡大する等の目標を掲げました。

生産者は、これらの目標の実現に向け、次の取組を行うことで、知事のみどり認定を受けることができ、府補助金の採択等で優遇されます。

- ①土壌診断に基づく土づくり、化学肥料・化学農薬の使用低減
- ②施設園芸の省エネ化等による、温室効果ガスの排出量削減
- ③その他(バイオ炭の農地施用、生分解マルチの利用等)

新たな認定制度では、これまでの制度^(※)と比べて、より幅広い取組が対象となる他、グループでの申請も可能ですので、まずは普及センターへ御相談ください。

※新たな認定制度の開始に伴い、エコファーマー制度は順次廃止されます。



生分解性マルチの使用



堆肥の施用による土づくり

京都府立農業大学校の実践カリキュラムを経て 頑張る若い農業者

黒川 尚輝さん・黒川 杏海さん（伏見区羽束師）

黒川尚輝さんは、京都府立農業大学校卒業後、農業生産法人で2年間学んだ後、羽束師で就農されて4年目になります。同じく農業大学校を卒業した奥様の杏海さんと2人で協力しながら営農しています。



現在は、4年前に始めたオクラの栽培が経営の中心となっており、令和2年に発足したJA京都中央の京おくら出荷部会に所属し、「京おくら」のブランド名で出荷しています。

早朝から作業することで、収穫から出荷までの時間が短く鮮度がよいため、市場からも大好評。出荷量も増え、今では京おくら部会の主力生産者となっています。

オクラの他には、サニーレタスや水稻栽培を行っています。サニーレタスは、昨年の羽束師・淀地域農産物品評会で優秀賞を受賞。さらなる技術力向上のため日々研鑽されています。

中西 俊樹さん（伏見区向島）

中西俊樹さんは、京都府立農業大学校卒業後、向島で就農されて6年目になります。現在では、6年前に始めたサニーレタス栽培が経営の中心となっています。サニーレタスは秋から春にかけて品種を変えながら長期間出荷され、株張りがよく新鮮であることから、市場で大変好評です。

同地域ではサニーレタスを栽培する若手農家が多く、中西さんは中核農家として日々栽培技術の向上に取り組んでおられます。特に、土づくりにこだわり、堆肥と有機質肥料を投入し、土壌中の生物の多様性を保つことで出荷品質の向上を目指されています。



船越 保秀さん（伏見区向島）

船越保秀さんは、京都府立農業大学校卒業後、農業生産法人で1年間勤務されたあと、向島で就農されて6年目です。冬はキャベツ、ブロッコリー、夏はエダマメ、ズッキーニ、秋は水稻等、多種の品目を出荷されており、特に結球レタスとサニーレタスが経営の中心となっています。食味のよい品種を選定し、堆肥による土づくりと有機質肥料にこだわった栽培を行っておられ、出荷先の直売所では「船越さんのお野菜はおいしい!」とお客様からとても好評です。現在は、環境にやさしい、持続的な農法への取組として、地域で回収した「コーヒー粕」を栽培に取り入れる「mame-eco(マメエコ)プロジェクト」に参加しています。その一環として、コーヒー粕を畝に表面散布することで、雑草対策やナメクジ対策になるとのことで、コーヒー粕堆肥を自作し、自身のほ場で実証試験を行っています。実用化が見えてくれば地域にも広げていきたいとのこと。



匠・技能登録

京都府では、農山漁村地域で磨かれてきた伝統的かつ貴重な生産・生活技能を登録し、次世代に引き継いでいく取組を平成9年から全国に先駆けて進めています。また、その中から将来にわたり、継承していく必要性が極めて高い技能を保持しておられる方を「農の匠」として、認定しています

令和5年度 農の匠（京都府農山漁村 伝承優秀技能認定）の紹介

「栃餅づくり」

小南 道子さん（左京区久多）

小南さんは長年の経験から栃餅づくりのために必要な栃の実の皮むき、あく抜きなどの技術を保持されています。さらに、栃の実の冷凍保存技術もお持ちのことから、一年を通じて質の良い栃餅を作られています。



また、地域の女性を対象に栃餅づくりの伝承活動も実施され、後継者育成にも努めておられます。



農山漁村伝承技能登録

今年度に登録された方は以下のとおりです

鹿ヶ谷かぼちゃ及び鷹峯とうがらしの栽培技術	樋口 昌孝さん（北区鷹峯）
ブドウ（ピオーネ、シャインマスカット）の生産技術	竹村 貞治さん（山科区勤修寺）
酒米「祝」の栽培	北川 美一さん（右京区嵯峨）
酒米「祝」の栽培	山田 耕司さん（右京区嵯峨）
米俵の俵装	竹内 昭文さん（右京区京北）
水耕京都方式による高品質トマト生産技術	物部 光宏さん（西京区大原野）
クワイの生産技術	西村 正昭さん（伏見区竹田）
長岡京市の花菜栽培	岡本 博さん（長岡京市）
竹材（京銘竹）生産	清水 良廣さん（向日市）

伝統技能登録紹介 長岡京市の花菜栽培

花菜栽培で京都府農山漁村伝承技能に登録された3名の方をご紹介します。

「一産地一品目一億円」を目標に関東方面への販売促進キャンペーンや試食会を、精力的に開催したり、マスメディアを使ったPR活動を積極的に展開する等、長岡京市の花菜ブランドの浸透や産地の維持発展に多大な貢献をされました。

学校給食に花菜を供給し、地産地消や食育の推進に寄与され、早春の季節を彩る京のブランド産品に育て上げられました。

第一に健全な野菜を育てるために、土づくりを最も重要視され、地元特産のタケノコ加工品で生じる皮を有効利用した堆肥を使用し、環境にやさしい農業を実践されています。また、花菜専用ペレット肥料を使用し、京都こだわり農法に基づいた栽培を行うことで、減農薬・減化学肥料を実践し、常に工夫と研鑽を積み重ねながら安心・安全な農業を率先垂範されています。

花菜の品種育成・栽培、選別、パック詰め等の技術を若い世代に伝承し、担い手育成にも貢献されています。



高橋 壽次さん



小山 俊夫さん



岡本 博さん

地域で大活躍「頼れる農業士さん」

ひの ゆうや
日野 裕也さん
(西京区桂)

日野裕也さんは、西京区桂で就農されて10年になります。今では、7年前に始めた露地ナス栽培を中心に、家族で協力しながら6月から12月に朝採りナスを市場出荷されています。

先輩農家からの助言を参考にして今の経営スタイルが確立できた実体験から、農家同士の交流を重視されています。例えば、京都市農業青年研究会の先輩からの助言を参考に、日野さんの得意品目であったナスにしほり、年ごとに規模を拡大されてきました。規模拡大する中で、久御山の先輩の技術をベースに、剪定誘引を省いた栽培にも挑戦し、自分の栽培スタイルの確立に奮闘努力されています。

また、日野さんが営農する地域でも農地を手放す農家が増える中、地元の生産組合の一員として、地域外からも担い手が農地を借りに来てくれるような環境を整備するために活動されています。作り手のいない貸農園を自ら引き受け、復旧作業と移動交渉をする中で、貸農園から通常の農地へ戻す大変さを痛感されています。

その経験から農地を適正利用していただけるよう組合として活動しています。今後も、地域外からの仲間が増えるよう地域の農地の環境整備を続けたいと考えられています。



今年度に認定された農業士さん よろしくお願いします。

<指導農業士>

<青年農業士>



まつき たかし
松本 孝史さん
(西京区大枝)



こばやし けんいち
小林 謙一さん
(長岡京市)

今年度で退任される農業士さん 大変お世話になりました。

<指導農業士>

しみず さちお
清水 幸雄さん(向日市)

<青年農業士>

ないとう ゆうき
内藤 勇貴さん(伏見区三軒)
たなか りょうた
田中 良大さん(山科区柳辻)

第7回 京のプレミアム米コンテスト

応募点数145点の中から田中良和さんのコシヒカリが「最高金賞」、木村貞志さんのコシヒカリが「金賞」、仲上泰夫さんのヒノヒカリが「入賞」に選ばれました。



田中 良和さん
(右京区嵯峨越畑)



木村 貞志さん
(右京区嵯峨越畑)



仲上 泰夫さん
(右京区京北)

ノウフク・アワード 2023

農林水産業で障害者等の多様な能力が発揮され、農林水産、福祉分野の課題解決、障害者等の社会参画、地域農業の維持・発展、地域活性化に貢献している団体や企業、個人などを表彰するノウフク・アワード2023において株式会社しんやさい(南区唐橋)が優秀賞に選ばれました。



発行 京都府京都乙訓農業改良普及センター

〒615-0846 京都市右京区西京極徳大寺団子田町15 TEL 075-315-2906 FAX 075-315-2909
mail: kyoto-nokai@pref.kyoto.lg.jp HP: <http://www.pref.kyoto.jp/kyoototokuni-f/index.html>



QRコード